

断章 (XI)

山中 哲夫

外国語教育講座

Fragments(XI)

Tetsuo YAMANAKA

Department of Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya448-8542, Japan

CCCI

《詩人曰く「原口は人生に最初から失恋して生まれ
[て]来たやうな男だつたよ。』》原口統三の失恋は人生にたいしてではなく、両親にたいしてのものだった。一方、憎んでいる父親に送金を請う嘉村磯多の媚びるような手紙には、父親との無意識的な同性愛が感じ取られる。これは宮沢賢治にも感じられるものだ。ともかく、原口統三の自殺、嘉村磯多や宮沢賢治の仏教への帰依——藤村操の時代から、そこには誕生以来の根深い罪責感が潜んでいる。これが『二十歳のエチュード』となり、『崖の下』となり、『春と修羅』を生み出した。

CCCII

嘉村磯多の父親との同性愛願望は、高価なナイフをさらに高価な別のナイフに買い換える『ナイフ』の挿話によく表われている。ここで守り刀となるナイフは言うまでもなく父親のペニスを表わしており、ナイフの買い換えは自己のペニスと父親のペニスの交換を意味している（去勢とアナル・エロチズム）。神聖にして犯すべからざる天皇も、彼がすべてを犠牲にして全精力を傾けた「芸術」も、無意識的同性愛の対象である父親と等価のものであり、そういったものに彼はマゾヒズム的に恋着している。それらを前にして彼は平伏し、自らを卑下し、自らを虐げて、そのような形で相手に「媚び」ながら、相手に愛を乞うのである。これが自己処罰を意味しているという点でも、ナルシズムの程度の差こそあれ、多少とも太宰治に似ていない。

CCCIII

女は愛に生きる。男は愛だけでは生きられない。

CCCIV

ふり返ると闇がある。

CCCV

自殺は発作的に行われるが、自殺までの過程には長い因果のつながりがある。フラフラと線路上を歩くには、それまで途方もなく長い醒めた葛藤がある。たとえ前日までそのような企てをしようとは夢にも思っていなかったとしても。それはたんなる意識上のことにすぎない。すべては「必然的に」行われるのである。

CCCVI

《彼の手からののがれようとするのは無駄な努力である。私はやつと彼の匿れ場所を発見した。彼は私の中に住んでゐる。ずるぶん以前から、たぶん私の生まれた時から、私の中に住んでゐる。好む好まぬにかかはらず、私の同居人だ。彼を無視して背中を向ければ、背後から刺す。私は彼と仲よくしようと思つてゐる。》(林房雄) —— “彼”とは「死」のことである。

CCCVII

「私は現在数へ年で五十二である」と林房雄は書いたあと、昔ならもうそろそろ隠居してよい年だ、明治の文豪たちはそんなに生きなかつた、近頃の作家たちは皆長生きで、年の取り方が遅すぎる、と嘆いている。林がこの文章を書いたのは昭和三十年以前のことであ

る。精神の自由を求めてあらゆるものと闘った若年期に、かえって精神の自由はなく、闘いを抛棄し、進歩や変革をあきらめた老年期に、むしろ精神の自由がおのずから心の中に生じてくる。それが「遊び」というもので、これからは文学を「遊び」として書きつづけてゆこうという趣旨の言葉で彼の『文学的回想』は締め括られている。先の「死」についての想いもその中の一節である。いよいよ人は長生きとなり、肉体が若い分だけ、精神の成長は遅くなり、いつまでもつまらない迷妄にとらわれ、精神的右往左往をくり返している。虚無と遊びと死とが幸福に結びつく年齢はいつになったらやってくるのか。

CCCVIII

昭和二年に中原中也と知り合い、以来奇怪な交友関係をにつづけた(相手が中也であれば誰でもそうなるが)河上徹太郎は、全三巻の全集だけで詩人の「善意に研ぎすまされた魂の美しさ」にふれる読者は羨ましいと言った。あの帽子を被った写真から中原中也論をはじめめる人は幸福だ、というわけである。河上徹太郎はこうも言っている——《非常に鋭く人を見抜き、又、相手に不思議な自負で阿ると共に、一方相手は飛んでもない役を振られた不愉快を与へられたりするのである。その意味では、中原は、悪意ある冷酷なリアリズムの小説家と同じやうに、モデルがなければ詩の書けない人であつた。》(『私の詩と真実』)

CCCIX

年とともに「死」が観念的なものから身体的なものへと変ってきた。哲学的なものから生物学的なものへと変ってきたと言ってもよい。フロイトが晩年に持ち出した「タナトス」とはこのようなものなのか。個体発生から系統発生へ。虚無や遊びはこれを越えた先にあるのか。青年の観念的な「死」への思いが文学的・哲学的虚無(あるいはロマン主義的虚無)と結びついたものであるとすれば、老年の身体的な「死」への思いは、生物学的虚無(こういう言い方があるのかどうか分らないが)と結びついたものであろう。これはいわば細胞レベルの問題である。一個の細胞が死滅する代わりに、他の新たな細胞が誕生する。細胞から細胞へと何ものかが受け継がれる。個体という一つの細胞は死滅するが、子孫という別の新たな細胞がその後継となって、何かを次世代へ伝達する。「死」とはそのようなものなのか。そうだとすれば、それは「生」の別名ではないのか。

CCCX

寓意的な *la Mort* や抽象的な *la mort* から具体的な *une mort* へ。青年から老年へ。『カラマーゾフの兄弟』はもう卒業しなければならない。母親の墓前で懺悔してもはじまらない。それもまた一種の甘えなのだ。

CCCXI

死ぬ数ヶ月前の中原中也のことを島木健作が書いているが、その姿は神西清も檀一雄も河上徹太郎も描いていない佻しいものである。散歩から戻ってくると来客があった。「玄関をすぐ上つたところの隅に、壁を背にして、坊主頭の小さな人が背をまるめてうづくまつて」いる。それが例の詩人であることをやや意外に思い、さらに話してみると「おとなしい、ものしづかな、礼儀正しい人」で、「相手の気持などもこまかに汲んで、おもひやりが深かつた。」河上が言った「善意に研ぎすまされた魂の美しさ」の一端がこれであろうか。しかし迫害妄想じみたところもあり、島木が短篇集を所望されて躊躇していると、中也は怒ったような口吻で「どこにあるんです」と周囲の書棚をながめまわす。自分の心の病気を自覚していないという点でも真性の病気の存在をうかがわせる。肝臓も病んでいたのだろう、「顔が青白く、ややむくんでゐて、眼にも力なく、歩行もいくらか困難のやう」であった。顔がむくんでいたのは水が溜まっていたせいかな。島木と会って自ら訳した『ランボオ詩集』を手渡した一ヵ月後に中也は死んだ。病名は結核性脳膜炎。草野心平がラジオで朗読した中也の『夏』という詩を縁側で聞きながら、島木は「息苦しいほどのせつなさに心をおされた」と述懐している。『夏』という詩には、確かにそういうところがある。ゴッホの絵に似た夏日の燃えあがるような気だるさ、悲しさが、そこにはある。

CCCXII

中原中也は遣り切れない詩人である。この「遣り切れなさ」は中也独特のものである。それにしても、ある人が言っていたように、種田山頭火にしても金子みすゞにしても、どうして山口出身の俳人や詩人はこうも皆さびしい人ばかりなのだろうか。

CCCXIII

小説を小説として読むな、と小林秀雄がどこかで書いていた。わたしが小説を読めなくなったのは、小説を小説としてしか読めなくなったせいだろう。現実には広く深い。これを描き切れるだけの作家が近頃いなく

なったせいかもしれない。レアリテを出そうとして四苦八苦している彼らの手つきが分ってしまい、途端に興ざめしてしまうのである。SF小説や幻想小説の世界に簡単に入り込めないのも、現実の複雑怪奇さを若い頃よりも深く知ったからだろう。描かれているその世界が信じられないのである。若い頃に恋愛小説を書いていた作家が、年を取ると歴史小説やノンフィクションに移行してゆくのも、これと同じ事情によるのかもしれない。幻想小説で、唯一レアリテを感じさせる作家は川端康成だけである。

CCCXIV

啄木が吐いた血のやうに
あざやかに散り敷いた
生垣の花
ふり返りふり返り見る
夕日の坂道 (『山茶花』)

交差する三つの斜線——肩越しにふり返る視線、長く尾を引く冬日の光線、山茶花の生垣がつづく坂。生きていたときに啄木が吐いた血はこうだったのだろうと思わせるような、山茶花の真っ赤な花びら。奈落の上に張られた綱を渡っているようなあやうさ。不安定な世界の不安定な視線と色彩。

CCCXV

法隆寺の百済観音について書かれたもので、おそらくもっとも美しい文章のひとつは、昭和十二年秋から翌十三年春にかけて書かれた亀井勝一郎の随想であろう (『初旅の思ひ出』)。やや感傷に流されている憾みがなくもないが、それでも山道で思いがけず岩清水に出会ったような清冽さを感じさせる文章である。《百済観音の前に立つた刹那、深淵を彷徨ふやうな不思議な旋律がよみがへってくる。仄暗い御堂の中に、白焰がゆらめき立ち昇つて、それがそのまま、永遠に凝結したやうな姿に接するとき、我々は沈黙する以外にないのだ。》名古屋市博物館で、千五百年近く前に彫られた飛鳥のこの巨大な古仏を見上げたとき、わたしには「木のお化け」にしか見えなかった。木も古くなるとこんな仏像に化けるのかと思った。確かに何かがゆらゆら立ち昇っている気配がした。パリでこれを見たフランス人はどう思っただろうか。

CCCXVI

田中恭吉。傷める芽。二十三歳で亡くなる前、病院の薬の包み紙に挿画のデッサンを描き、その裏に短詩を綴る。この詩を中野重治は絶賛して、《田中恭吉が

病院の薬の包み紙かなんかに、もう死にかけていながら書いた短い詩の行も非常にすぐれたもので、少なくとも非常にすぐれたものを含んでいた》と語っている。折り目や皺がないので、未使用の包み紙を使ったものだろうが、表に描かれた草花のデッサンは『月に吠える』のためのものだったのかもしれない。朔太郎はその詩集の巻末で《赤い絵は劇薬を包む四角の紙に赤いインクで描かれてあつた。(……)非常に緊張した鋭いものである》と言っている。わたしはその薬の包み紙の赤の美しさに陶然となった。えも言われぬくすんだ赤である。デッサンの線も確かであつた。裏に綴られた短詩は——例えばこのようなものであつた。

春もやや深い地上の夕に、
芽は合掌してゐる

てのひらをあけて日の光を掬んでゐる。
彼はこのつつましいいのりを亡びの日までわすれない
彼は夜についておそろしいけいけんをもつてゐる。(『ゆうつげぐさ』)

CCCXVII

二十三歳で末期の目をもつ男の哀れさを思うべし。

CCCXVIII

戦前には敵対する陣営の論客として張り合った林房雄と中野重治だが、皮肉にも晩年には同じような言葉で、同じような心境を吐露している。林は言う、《平均年齢は上昇し、人は六十歳をすぎても、まだはたらしきつづけなければならない。馬車馬のやうに、重荷をせおはされた老いぼれ馬のやうに。頭をまるめて旅に出ることもできない。そんな風流乞食をとめてくれる宿屋はどこにもない。現代の宿賃はどこでも高いのだ。》現代人の寿命が延びたことについて中野はこう語る、《ゴムをずうっと引っ張ったようにしてただ延びたのではなかろうかと思うことがあります。(……)延びて、よき老年期がわれわれにあるかという、(……)まずないでしょう。五十になれば隠居していたのが、六十になっても、ひどい状況のなかで、朝から晩まで汗水垂らして働いていかなければ生きていけない。》今の時代はさらに過酷である。伸び切ったゴムのような老年期を“生涯現役”といった顔つきで生きてゆかなければならぬとしたら、滑稽を通り越して悲惨である。「夭折」という言葉は「天才」という言葉とともに死語となってしまうのだろう。

CCCXIX

アラン＝フルニエの『ル・グラン・モーヌ』をテキストに選んでくれた若い先生は、いくつかの章だけを抜粋して学生たちに読ませた。大学二年生の語学力ではとうてい一年間で完読できないからである。今度改めて最初から通読してみて、先生が前半と後半の重要な章を省いていることに気づいた。結末は悲劇的なものだった。まさしくそのような境遇に先生もその後陥った。わたしは不思議な気がした。先生が無意識に避けた箇所は、先生の未来を予告するものだった。いつか雪柳の家にたいするこだわりをわたしが先生に語ったとき、返ってきた先生の言葉には、先生自身のこだわりが反映していた。先生の不幸はそのときからはじまっていたというべきかもしれない——「君の雪柳の家への思いは、幸福な家庭のイメージとして、一生消えずに残るよ」わたしが二十二歳頃のことである。

CCCXX

マチスのデッサン。地中海の明快な線。描く喜び。眺める幸福。髪を束ねる女の手の魅力。

CCCXXI

マチスの色彩。日本人には絶対に出せない色。

CCCXXII

甲斐ゆみこ。夜の水の詩人。暗渠にうごめく鱗あるもの。それがときおり月の光に一瞬きらめく。

CCCXXIII

甲斐ゆみこ。白昼の花の詩人。しかしこの危険な花叢には蛇が潜んでいる。するするとすべる音がする。

CCCXXIV

甲斐ゆみこ。わたしには永遠に解けぬ謎。

CCCXXV

漱石の長篇小説を読んでいつも感じる飽き足らなさ、不満を、正宗白鳥が見事に表現してくれた。彼の夏目漱石論にはわたしの感じていたことすべてが書かれてある。登場人物がいきいきと生きていないこと、描写ではなく説明であること、深遠で複雑だが、頭でこしらえた窮屈な小説世界であること、むしろ何気な

い短篇や随筆、あるいはスウィフト論のような十八世紀イギリス文学批評に見るべきものがあること、等々。夏目漱石はもちろん偉大な作家である。しかし小説家らしい小説家とは言いがたい。和漢洋いずれにおいても深い学識を持った学者詩人であることは間違いない。多彩な才能を持った学者詩人が小説を書きつけることによって、ようやく小説家に近づいてきたその矢先に、不幸にして死によって中絶させられてしまった、という印象を受ける。彼の作品は無理してこしらえた人工の産物に他ならないが、ただその中で、自己の複雑な情動の流れをそのまま告白した『道草』は、もっとも自然な小説らしい小説ではないかと思っている。白鳥も漱石論で同じことを述べていた。夏目金之助という個人の精神病理学的な側面については別の興味を持っているが、それはまた別次元の話である（作家漱石がそれと知らずに、創作を通じて、一私人の金之助の精神病を食いとめ、あるいは治療していった、という面は今後研究されてよい問題だろう）。

CCCXXVI

わたしの思いをほとんどすべて白鳥が代弁してくれたが、白鳥が言わなかったことと言えば、彼が漱石を批判した部分、多く欠点と見做した部分が、漱石の個人的事情に由来していて、これは漱石自身にもどうしようもなかったという点である。漱石はほとんどの作品においても自己を語っている。自己を語るまいとして語っている。だから小説が窮屈に、つまらなくなるのである。白鳥は言う、須永の話は、あれはよい、千代子ははじめて血肉を持った女性として描かれている、しかし、須永の母が実母ではないという「作者のからくり」にああ、またか、と読者は興ざめしてしまう、と。興ざめしている白鳥の顔が目には浮ぶようだ。なるほどそうかもしれない。だがそれだけではない。言うまでもなく須永の出生の秘密は、漱石の出生の秘密の置き換えであり、彼の小説は常にそこから発生し、そこへ帰着するのである。小説家としては失格かもしれない。プロットや心理の葛藤、内省は複雑でも、漱石の小説の基本構造は意外に単純で、同じ構造の家をくり返し建て直しているだけである。まるで本当の自分の家の構造、本当の家族の構造を探しつづけながら見出せずにいる、その象徴でもあるかのように。

CCCXXVII

精神病と身体病。漱石の長男純一はこのように言っている——「もともと外部に原因のない厭世感、外的理由のない焦燥感や怒りである。それは抵抗を要求する。そして抵抗があれば爆発し、なければ内攻する。」外部の抵抗には狂気のような暴力が突然出現し、そう

でないときには胃潰瘍がひどくなる。胃潰瘍は自分自身にあたえる暴力に他ならない。この二つが同時に現われることはなかったらしい。胃潰瘍がひどくなればなるほど、周囲の親しい者への暴力は影をひそめたという。単なる気力の衰えというものではないことは明らかだろう。

CCCXXVIII

外国では子どもがいじめられて自殺することはないと言うと、学生たちは一様に驚いた顔をする。その驚きに、こちらが驚く。いじめられて自殺するのはそれほどめずらしいことではない、と彼らは思っているのだ。いじめられて自殺するのは弱い人間だ、とかつては考えられていた。いつの頃から変ってしまったのだろう。

CCCXXIX

外国ではめったにない、日本独特の現象に「親子心中」というのがある。自殺を決めた親が、この世に取り残される子どもを不憫に思って道連れにするのだ。外国人には考えられないことだ。道連れにされる方がよほど不憫なのだが、当人はそう考えない。親の生と子どもの生は一つに結びついていて、親の生が欠ければ、子どもはもう生きられない、と考えるのだ。この癒着の構造には親のマゾヒズム的傾向がうかがえる。これを逆にしたのが子どもの自殺である。自殺する多くの子どもは、親にすまないと思いながら死んでゆくのである。あるいは、親にすまないから死んでゆくのである。

CCCXXX

幸福は人格である、と三木清は言う。「人格は地の子らの最高の幸福である」というゲーテの言葉を引いて、彼は幸福になるということは人格になるということである、と明言する。そしてそれは外に現われる。「機嫌がよいこと、丁寧なこと、親切なこと、寛大なこと、等々、幸福はつねに外に現われる。(……) 幸福は表現的なものである。鳥の歌うが如くおのずから外に現われて他の人を幸福にするものが真の幸福である。」幸福は口笛。まことに彼の言うとおりに、倫理学から幸福論が抹殺されたときから、現代の哲学の不幸がはじまった。

(2010年8月30日受理)